



空を見詰
める首魁



川崎ゆきお

「体調と気温とはかなり関係するようすなあ」

「かなりですか」

「そうです。先日雨が降りかけの蒸し暑い日に散歩に出たのですが、体調が悪いのか、足が重い。息も弾むし、視界が狭くなるような閉塞感が出ましてね。家に戻ってからも呼吸が整わない。食欲はないのだけれども腹が減る」

「体調を崩されたのですね」

「大崩れではないが、身体がえらい。しんどい」

「はい」

「ところが翌朝よく晴れており、空気もカラッとしておる。それを見ただけで元気になってきた。気分が先ず違う。曇天を見ているよりもね。抜けるような青空、高いところには鱗雲。赤トンボが眩しい。これは光を反射しているためだ」

「天気が良いだけで、その変化ですか」

「そうだ。そして、いつものように歩いていたんだが、足が軽い」

「すると、体調が悪いときの最高の薬は天候ですか」

「そうなんだ。だから、色々と健康法をやったり、薬を飲んでも無駄なんだ」

「しかし、本当に悪い病気が進行していたのかもしれないよ」

「体調が戻れば、もうそんなことなど考えない」

「はい」

「その後私は体調が優れないときは天気のせいにするようになった。そして、天気の悪いときは、思った通り、具合が悪い。このときは省エネモードの低速モードに入れることにした。まあ、休憩に近い。横になって、ごろっとしておればいいんだ。ただ慢性の持病があつてねえ。これも楽になる季節と、そうでない季節がある。これだけは何ともならないがね」

「これからもお体だけを気かけながらお過ごし下さい」

「ははは、私の生きる目的は健康状態の維持だけかね」

「いえいえ」

「まあ、私の出番はもうなかろうと思うので、余計なことをしなくても済むが」

「はい、随分と余計なことをされました」

「言うねえ」

「あなたが作られた派閥、今も残っています。これが災いの元凶となったままです」

「あのときは、そうしないといけなかったんだ」

「部外の敵も多く作りすぎました」

「だから、生き延びたんじゃないか」

「そうなのですが、そんなことしなくてもよかったのではないかと、最近話題になっています。
検証で」

「派閥を作るのは競い合わせるためだ。それに意見の合わない連中と一緒に効率が悪い。何も
できん。部外のライバルを叩きのめしたのは、いずれ害をなすからだ」

「しかし、そのやり方が」

「やるときは徹底的に潰さんと、あとで芽が出る」

「そこまでやる必要がなかったのではないかと」

「じゃ、私は余計なことをしたのかね」

「いえいえ」

「そんなことを言うのなら、カムバックするぞ」

「あああ、それだけは」

「そうだろ」

「はい。健康だけを目的に生きて下さい」

「その方が、君たちも都合がいいだろ」

「はい」

「それで今日も私が妙な動きをしているのではないかと、見張りに来たのかね」

「違います」

「そうか、今日は雲が多い。少し体調が悪くなる頃だ」

「はい、余所見しないで、空ばかり見ていて下さい」

「ふん」

了